

聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第2章 モーセの祈り⑥



神によるリーダーたちの任命

民数記はモーセの生涯とリーダーシップの終わりを記録したのですが、モーセの祈りの働きについても、ここからはさらなる洞察を得ることができます。申命記3章でも、モーセは神にお願いをしています。「神、主よ。あなたの偉大さと、あなたの力強い御手とを、あなたはこのしもべに示し始められました。あなたのわざ、あなたの力あるわざのようなことのできる神が、天、あるいは地にあるでしょうか。どうか、私に、渡って行って、ヨルダンの向こうにある良い地、あの良い山地、およびレバノンを見させてください」（申命 3:24-25）。

ここでは、神を「神、主よ」ないし「主ヤハウェ(エホバ)よ」と呼びかけているということが重要です。「主」という言葉には、権利と力を所有していることが示されています。「ヤハウェ(エホバ)」という、契約をお守りくださるという意味合いの名前を選んでいることは、神とイスラエルとの間にある親密な関係を語るものとなっています。その結果、そこに恵みの雰囲気が存在するのです。この箇所におけるモーセの切なる願いは、神にご決断を変えてくださるよう願うものです。モーセはここに至るまでに、神の栄光を損ない、逆らってしまっていました。たえず反抗的なイスラエルに心の底から苛立ち、怒り心頭に達したモーセは、神への信仰と信頼を宣言することに失敗し、岩に語りかけるのではなく、怒りに任せて打ってしまったのです(民 20:1-13 節を参照)。結果、彼は神からの厳しい応答に直面するところとなりました。「あなたがたはわたしを信ぜず、わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった。それゆえ、あなたがたは、この集会を、わたしが彼らに与えた地に導き入れることはできない」（20:12）。

考え直してくださいと願うモーセに対する神の答えは、ノーでした。「もう十分だ。このことについては、もう二度とわたしに言うてはならない」（申命 3:26）。私たちはここで、次のように言いたい思いに駆られてしまいます。「神様、それは厳し過ぎますよ。なぜしもべの願いを聞いてあげないのですか？」神がなぜそれを拒んでおられるかについて、私たちは完全に理解できないかもしれません。しかし、知っておかなければならないことは、主権者である神は最善をなさるということであり、この最善は、しもべモーセのための最善であるのみならず、ご自分の民のための最善でもあるということです。もしも神がここでモーセの願いをお聞き入れになっていたならば、モーセを怒りの行動に駆り立てた者たちの間にはもっと反抗が起こったかもしれません。いずれにせよ、全く祈らないよりは、祈っても認められないほうがまだいいのです。

「人間には、一度死ぬこと…が定まっている」（ヘブル 9:27）とあるように、携挙の時にちょうど生きているクリスチャン以外は(I テサロニケ 4:17 を参照)、誰もが死ぬことになっています。しかしながら、モーセのように、いつ、どこで、何の病気で死ぬことになるかを神から教えていただける(民 27:12-13)人はほとんどありません。そして、確実な死に直面して、この献身的なしもべの素晴らしさと敬度さは再び輝きます。彼は約束の地に入る

のを楽しみにしていましたが、自らの失敗のゆえに、その喜びは与えられないことになってしまいました。恩赦の願いも拒まれてしまいます。しかし、それでもモーセは、自分の利益のことは捨て、人々のために祈るのです。

それでモーセは主に申し上げた。「すべての肉なるもののいのちの神、主よ。ひとりの人を会衆の上に定め、彼が、彼らに先立って出て行き、彼らに先立って入り、また彼らを連れ出し、彼らを入らせるようにしてください。主の会衆を、飼う者のいない羊のようにしないでください。」(民数記 27:15-17)。

神が会衆の上に立てられた人物が、必要なリーダーを定めることができるのは神だけだ、と認めたのです。なんと謙遜でしょうか。神にしかできないことを完全に認識しています。モーセほどの人ならば、自分の後継者は自分が選んだ人物、おそらくは自分の息子にしていただけるように願うこともできたかもしれません。しかし、彼の願いは違いました。「すべての肉なるもののいのちの神、主」がお選びくださいますように、と願ったのです。人の霊をご存じなのは神だけです。だからこそ、神の選択は、常に最善なのです。

ここに、信仰のリーダーを選ぶ上での貴重な教訓があります。外面を見る人々は外見や教育、能力、カリスマ的な賜物に基づいてリーダーを選ぶ傾向にあります。しかし、神は全く異なる根拠でお選びになります。心をご覧になるのです。モーセが神にお願いしたこの例は、クリスチャンの群れのために羊飼いを選ぶ形としても貴重な型なのです。

モーセはまさしく、神の「祈る人々の名鑑」の中では巨人とも呼べるわけですが、彼は同時に、人が理解できる形で神の臨在への道を明らかにする、神の代理人にもなりました。祈りは有限なものながら、それが最も高く顕される時、神の民は、無限で聖なる神の臨在へと招き入れられていくからです。

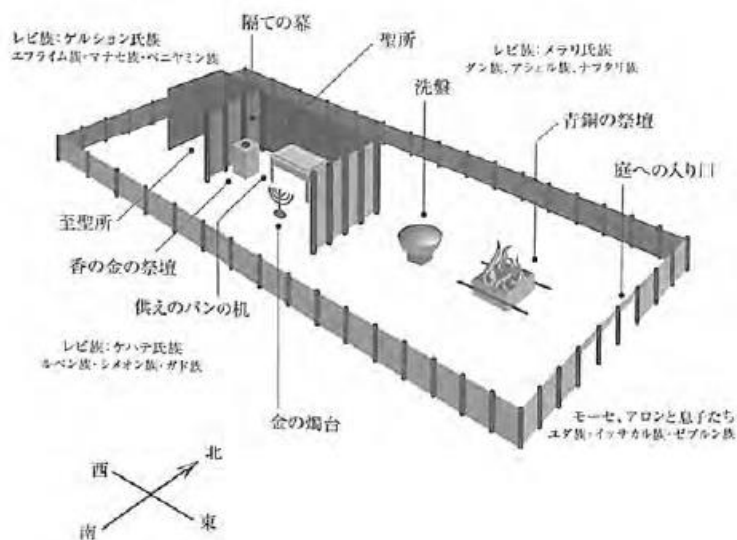
しかしここで、非常に難解な問いが起こってきます。罪深い存在と聖なる存在との間の、この逆説的で、明らかに不可能な結びつきはどのようにして起こるのかという問いです。どれほどの英知を尽くした枠組みを考えてみても、聖なる神の裁きをなだめたり、逃れたりすることのできる人は誰もいません。私たちの「いちじくの葉」のうち、「焼き尽くす火」に耐えられるものなど一枚も無いのです。神に近づくことのできる価値のある人など一人もいないのです。ならば、存在の本質において、かつ自らの抱える罪深い意図において、神からはるか遠く離れている私たちが、聖なる神にどのようにして近づくことができるのでしょうか。

モーセはその道を示されていました。神の教えのもと、彼はいわば、聖なる臨在に至るための道を説明する地図、青写真、図表などをいただいていたのです。「…それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。『よく注意なさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい』」(ヘブル 8:5)。

荒野の幕屋は神のデザインによるものでした。それは、栄光に満ちたご臨在が住まわれる至聖所へと至る道を、一步一步描いたものでした。幕屋は、イスラエルの人々の宿営が取り囲む中央に位置していました。各部族は、幕屋の東西南北にそれぞれ場所を割り当てられていました(民 2:1-31 を参照)。祭司であるレビ族だけが例外で、彼らは、幕屋と他の諸部族の間に割り込むように置かれ、幕屋を取り囲んでいました。「レビは、あかしの幕屋の回りに宿営しなければならない。怒りがイスラエル人の会衆の上に臨むことがあってはならない。レビ人はあかしの幕屋の任務を果たさなければならない」(民 1:53)。幕屋の東には、モーセとアロンとその子どもたちが滞在していました。「幕屋の正面、すなわち会見の天幕の前方に当たる東側に宿営する者は、モーセとアロンまたその子らで、イスラエル人の任務に代わって、聖所の任務を果たす者たちであった。」(3:38)。

宿営の中心には幕屋があり、幕屋の中心には、神のご臨在が宿る至聖所がありました。しかし、神のご臨在が中心にあったものの、一般のイスラエル人は神に直接に近づくことはできませんでした。そこに近づくのは、仲介者による儀式と血の犠牲を通してのみ可能でした。各イスラエル人にとって、神の臨在へのアクセスについては、三つの階層が関与していました。一般会衆、祭司たち、それに大祭司の三つです。一般会衆に属する人々は、幕屋の東側の入口に動物を連れてきました。これは、中心におられる神を礼拝したいとの願いを示すものであり、同時に、自分が罪人であることを認める良心があることと、その罪悪感を表す方法として血の犠牲に頼るということを認めるものでした。日々のいけにえと人々が持ち込むいけにえを含め、「ささげ物といけにえ」(ヘブル9・9を参照)を実際に捧げることと、幕屋での働きとを担当するのは、レビ族の祭司たちでした。しかし、究極の服罪をなすことと年に一度だけ実際に神のご臨在の中に身を置くのは、大祭司だけができることでした(章末の図を見ていただくと、幕屋とその様子、そして、そこに象徴されている神への一步一步のアプローチについて、基本的なことが理解いただけると思います)。

幕 屋



1. 幕屋から少し距離を置いたところでは、イスラエルの民の天幕が幕屋を取り囲んでいました。

「イスラエル人は、おのおのその旗のもと、その父祖の家の旗じるしのもとに宿営しなければならない。会見の天幕の回りに、距離をおいて宿営しなければならない」(民2:2)。ここで「距離」とある表現は、最も控えめに言って、会衆と神とが分け隔てられていることをほのめかしています。人々の罪深い状態のゆえに、彼らは、いけにえを携えてきたのでない限り、庭の入り口より近づくことはできませんでした。いけにえを携えてきた人々は、男も女も幕屋の入り口そのものまで来ることができました。この規則を破ることは、神の怒りを身に招くこととなりました。

2. 幕屋の入り口は、大祭司も含め、レビ族の祭司たちに限定されていました。

彼らは庭に入ると、すぐに青銅の祭壇に直面しました。そこから先に進むためには、彼らでさえ血のいけにえを捧げなければならませんでした。

3. 青銅の祭壇では、お金を捧げなければなりませんでした。

この祭壇の青銅(銅と亜鉛の真ちゅう)は、裁きを象徴していました(民 21:9 の青銅の蛇を参照)。罪深い性質を持つ人間が聖なる神に近づくには、あらかじめその罪が適切に取り扱われなければなりませんでした。罪に対する罰は死です---罪を犯した本人の死か、あるいは、神が受け入れることのおできになる、代理となる存在の死が必要なのです。

全焼のいけにえは…神の御前にあってはあらゆる人が有罪であり、血と全焼をもってその罪に対する罪悪感を示すことなくしては、神に近づくことも神の恩寵を確実にいただくことも絶対にできないということを、厳粛に宣言するものとして機能する。血は、律法が定める内容に違反した者に対する、永続的かつ多大な犠牲を伴う叫びなのであり、その叫びが沈黙させられるまで、そして要求されているものが満たされるまで、誰も神を見ることはできず、見ても生き延びることはできないのである。

4. 洗盤は、きよめを定めたものでした。

青銅の祭壇から先、しかし聖所の中までは、聖所に入る祭司は各自が、女性たちの鏡から作られた磨かれた青銅で覆われた(出 38:8 を参照) 洗盤、すなわち桶に向き合いました。いかなる汚れをも反映すべく、この桶は必要かつ永続的なきよめの場所でした。祭司はみな、神との交わりと礼拝、讃美の場所に入る前には自らを洗いきよめなければなりませんでした。

5. 聖所には三つのものが含まれていました。

①命のパンである方を予感させる供えのパンの机(ご臨在のパンの金の机)、②聖所での活動のために光を与え、神へと向かう私たちの道を照らしてくださる方の代わりである金の燭台、③聖所のはるか端、幕の横にあって、立ち上る神の民の祈りを表し、祈りと讃美を通じて神のご臨在に入っていくことを象徴する、香のための金の祭壇という三つです。

レビ族の祭司たちは、大祭司以外、そこから先へは行くことがありませんでした。いけにえを捧げ、身をきよめ、ご臨在のパンをいただき、香を焚くことはできましたが、彼らはそこで止まらなければなりませんでした。なぜなら、その前には隔ての幕が下がっていたからです。

6. 至聖所は、あらゆる場所の中で最も聖なる場所であり、神がお住まいになっている所でした。

至聖所は、イスラエルにとって、神のご臨在の究極的な証拠をもたらしてくれるものでした。アダムの子孫たちは(アダムは堕落した後もなお、神のかたちを表しており(創 9・6)、したがって、神と交わりを持つことができたことから)、神のご臨在が顕される所と、そのような望まれた関係に帰ることができない限りは、決して完全に元の状態に戻れたと感じることはなく、喜びに満たされることはなかったのです。もっとも、罪人にとっては、「焼き尽くす火」のある場所は非常に恐ろしい場所でした。地上の幕屋の役割は、神の民が将来、神の本物のご臨在に完全に近づくことができるようになることを指し示すことにありましたが、これはヘブル人への手紙にも描写されています。

第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、血を携えずに入るようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。これによって聖霊は次のことを示しておられます。すなわち、前の幕屋が存続しているかぎり、まことの聖所への道は、まだ明らかにされていないということです。(ヘブル 9:7-8)

神は、幕屋のデザインの中に、ご自分に近づくことの深遠なイメージを描いておられましたが、砂漠にいた神の子どもたちは、私たちが今日許されているような神への近づき方を楽しむことは決してありませんでした。彼らを与えられていたのは影に過ぎませんが、私たちは本物をいただいています。彼らを与えられていたのは型に過ぎませんが、私たちはその型の成就したものをいただいているのです。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。(ヘブル 10:19-22)

祈り深いリーダーに従う人々は幸いです。主はあなたを、信仰のリーダーの一人として用いてくださるので、常に祈りを一番の優先事項に保ってください。旧約聖書のこの祈りの巨人についての学びの章を閉じるにあたり、申命記 26 章にあるモーセの感謝の祈りと、申命記 32 章、33 章にある彼の祈りの歌を読み、黙想をしてください。

学びのための問い

1. モーセの祈りの中には、すぐに答えられないものがいくつかありました。なぜでしょうか。
2. モーセのとりなしの祈りを特徴づける要素としては、どんなものがあるでしょうか。
3. モーセの祈りの中には、祈った通りに答えられないものがいくつかありました。なぜでしょうか。
4. 幕屋とそこにあるものについての学びから、祈りと神に近づくことについて学ぶことのできる教訓としては、どんなものがありますか。
5. 私たちが祈るべきでないのは、どんな場面でしょうか。
6. 信仰のリーダーたちが祈りを最優先にしなければならない理由としては、どんなものがあるでしょうか。

? 質問

1. 「主」という言葉にはどのような意味があり、神とイスラエルのどんな関係を語っていますか？ 祈りが聞かれないと思う時に、この「主」という言葉から私たちは何を信じるべきですか？ あなたにも祈りが聞かれないと思う経験がありますか？
2. モーセは後継者について祈った時、何を認めて祈りましたか？このことから信仰のリーダーを選ぶ上で貴重な教訓は何ですか？ 「これは確かに神が選ばれたことだ、人の決定ではない」と思った経験があれば分かち合ってください。
3. モーセは祈りの人であると同時に、人々に神の臨在への道を明らかにする人でもありました。神はどのように神の臨在への道を示していますか？
4. 幕屋は人が神に近づく道を指し示すモデルです。幕屋の様子は人が神に近づくために重要なことを教えています。あなたにとって、神に近づくために特に重要だと思うこと、あるいはあなたが心がけていることがあれば分かち合ってください。
5. あなたが信仰のリーダーとして神に用いられたいと願うなら、常に祈りを一番の優先事項に保ちましょう。祈りが消えてしまうと信仰生活がどうなってしまうのかわかり合いましょう。